

# 分裂文についての一考察

安藤裕介

## A Study of Cleft Sentences

Yusuke ANDO

【要約】安藤(1987)での提案, 即ち, 分裂文の焦点の位置に生じる要素には, 形式的にしる, 意味, 情報的にしる, 適度な一つのまとまりが必要なものであり, それが成立した時にのみ限定されやすさの向上を観察することができるという考え方を, 日本語の場合にも適用する事が基本的には可能である. ゆえに, 伊藤(1992)の様に, 付加的制約を課する事は, 言語理論のより高い一般性, 普遍性を達成するという立場から見れば不相当だと思われる.

【キーワード】分裂文, 普遍性, 限定, 焦点, 意味的・情報的まとまり, 名詞性, 情報構造, 叙述的表現, 名詞+格助詞, 副詞節

### 0. 序

筆者は, 拙稿, 安藤(1987)において, 分裂文の焦点の位置に生起できるのは, いかなるものかという, この構文の中でも, 特に多くの議論がなされてきた問題を取り扱った. そこでの議論は, 英語に限定されていたが, かなり普遍性の高い基本原理から導き出された結論であったので, 他の言語にも, 基本的には適用可能なものとして扱うことができる様に思われる. したがって, 本稿では, 安藤(1987)での提案が, 英語だけではなく, 他の言語(本稿では日本語のみを扱うが)にも, 基本的にはあてはまるということを論証していくことを最大の目的とする. 議論の手順として, 第1章では, 上述した安藤(1987)の提案を概観する. 第2章では, 日英語の分裂文の焦点化可能な要素に関する制約を中心になされた対照研究である伊藤(1992)の主張を批判的に検討する. 最後の第3章で, 結論と今後の研究課題を述べる.

### 1. 安藤(1987)の分析

- 1.0. 上述した様に, 本章では, 本稿の議論を容易にするために, 安藤(1987)を概観する.
- 1.1. 安藤(1987)では, 分裂文<sup>1)</sup>の焦点の位置に最も生起しやすいものとして, 名詞句を取りあげ, それについての分析をまず試みている.

(1) It was a car that she bought.

(1)からわかる様に、分裂文の焦点の位置には、名詞句が容易に生起するわけだが、通常、それは限定的表現に限られ、叙述的表現は生起しにくいと言われてきている。それは(2)が許容されないことから理解できる。

(2) \*It is a *football coach* that John is.

この様に、確かに、名詞句と言えども、叙述的表現の場合、分裂文の焦点の位置には生起しにくいわけだが、常にそういうわけではなく、次の様な場合、叙述的表現でも、分裂文の焦点の位置に生起しうる。

(3) Was it *an interesting meeting* that you went to last night?

(4) It wasn't *interesting things* that he told me.

(5) It was *an interesting meeting, and a very pleasant one*, that I went to last night.

(6) It is *an important meeting* that I'm going to and *an interesting subject* that they're discussing.

1.2. これらの事から、筆者が導き出した結論は次の様なものである。まず、狭い意味で、叙述的性質を有する名詞表現も、限定的名詞表現と同様、分裂文の焦点の位置に生起する事は可能だが、(当然のことながら、全ての叙述表現の生起が可能というのではなく、主題に対して、ある属性を、叙述という形式を表面上、取りながら、付与するのに十分な程、限定された一つのまとまりを持った表現のみ可能なのである。)それも広い意味では、限定(指示)的性質を有すると見なしうるので、「分裂文の焦点の位置に生起できるのは、限定的性質を有する表現である」という基本原理を広い意味で解釈して、その適用範囲を広げる立場を採用するのが望ましいということである。次に結論づけられた事は、何故、限定的性質を有する表現のみが、焦点の位置に生起できるかという事に関してである。その事は、当然、この構文の本来的性質と関係していると思われる。即ち、この構文は、通常の構文とは異なり、明示的に、ある要素のみに光を当てる、換言すれば、コミュニケーションを行う上で、一つのまとまりを与えるという構文なのである。したがって、その一つに定められた焦点しか有することができない、周囲から区切られた要素を含むこの構文には、基本的に限定(指示)的性質があるのは至極、当然なのである。

1.3. 安藤(1987)ではまた、分裂文の焦点の位置には、通常、最も生起しにくいと考えられている副詞句について議論が進められている。

1.4. 確かに、上述した様に、副詞句は、分裂文の焦点の位置には生起しにくいだが、次の様な例においては、そうとは言えない。

(7) It was *abroad* that we heard about the news.

(8) It was *so very loudly* that they argued.

(9) It was *intonationally* that these linguistic units were separated.

(7)は場所の副詞の例, (8)は so very の様な省略不可能な要素が副詞に付加された例, (9)は affective という素性が含まれている副詞の例である。

この様に、副詞句と言えども、その種類、付加されている語句、それに含まれている意味等により、即ち、ある条件下では、分裂文の焦点の位置に生起しうるのである。

- 1.5. 天野 (1976) では、この条件は、分裂文の焦点の位置に生起する副詞句が、他の要素よりも情報価値が高く、独自の情報単位として成立する時、満足されると考えられている。しかし、安藤 (1987) では、その考え方では、必ずしも十分でないと考えられている。それは、天野 (1976) の様な情報の重要度という考え方では次の例が説明できないからである。

- (10) \*It was *carefully* that John did it.  
 (11) It was *with care* that John did it.  
 (12) It was *yesterday* that John replied politely.  
 (13) \*It was *usually* that John replied politely.

即ち、(10)と(11)の間、及び、(12)と(13)の間では、それぞれ、容認可能性の相違にもかかわらず焦点の位置に生起する要素に関して、情報の重要度の差を見出しにくい様に思われるのである。

- 1.6. したがって、安藤 (1987) では、副詞表現の場合も上述した名詞句の場合と同じ様な扱いをする方が妥当であると考えられている。即ち、焦点の位置に生起する要素の容認可能性は、語彙に左右されるのではなく、限定的性質を有する要素、つまり、どの様な形式を取るにせよ、限定されやすい要素から成る表現であるかどうか、やはり、その容認可能性と関わっている様に思われるのである。したがって、天野 (1976) の主張する「情報的な重要度、まとまり」という考え方は、重要であるが、単にそれにとどまるだけでなく、もう一歩進んで、他のレベルでのまとまり (意味的・形式的レベル等) とそれを包括する「限定されるのに十分なまとまり」という原理で説明を試みた方が、この問題の説明能力は高まるし、名詞句と同一原理で説明できるという有利性があるように思われる。
- 1.7. 安藤 (1987) ではさらに、それまでの説明原理が、文・文法だけでなく、談話文法にも適用可能であるということが論じられている。

- (14) (an author's response to this question : "Do you find it easy to conceive of and start a new work ?") Ideas for novels come to me either with a great deal of difficulty and after a great deal of thought, or *very suddenly*, as if I were being handed a summons to write. It was very quickly, for example, that I thought of the basis for One Sunday Afternoon, although I didn't get around to writing it for several months.

下線部の分裂文は、単独では許容されないが<sup>2)</sup>、(14)の様な文脈では許容されると Bor-

kin (1984) で述べられている。この理由に対して、筆者は安藤 (1987) において、次の様に述べている。先行文脈において現れた表現は、動詞的なものであれ、名詞的なものであれ、知覚処理された後は、名詞的なものとして生起可能であり、ゆえに、分裂文の場合も、動詞的性質を帯びた表現 ((14)の *very suddenly*) は、名詞的に、認知、記憶されうるのであるが、それが、後続文脈に現れた表現 ((14)の *very quickly*) と、意味内容、形式に関して、ある繋がりを持った場合に、何らかの意図、例えば、比較、対照の意図のために、その先行表現と後続表現を、特に取り出すとしたら、その意図を達成するためには、その言語形式を同タイプのものにする必要がある。それゆえに、後続表現も、形式的には動詞的性質を帯びていても、先行表現の影響により、名詞的性質を帯び、限定的に、際立たせる事が可能になり、よって分裂文の焦点の位置への生起が可能になると思われる。いずれにせよ、この事により、上述した説明原理がここでも適用可能であるという事が明らかになったと思われる。

- 1.8. 上述の説明原理が、これまで扱ってこなかった語類、構文にも基本的に適用可能であることも安藤 (1987) では述べられている。

(15) It was *black* that he drank it.

(16) Was it *live* that they eat them?

この様に、形容詞も許容されるのは、焦点の部分の限定性 (既定性)、名詞性が高まっているからであろう<sup>3)</sup>。

(17) It was *even though he had his glasses on* that I recognized him.

(18) It was *because he was nervous* that he left.

(19) \*It was *for he was nervous* that he left.

(17)の様に、*though* 節が許容されるのは、*even* がそれを含む表現を極めて限定度の高いものとして取り出す機能があるからである。(18)が(19)より容認度が高い事にも基本的には同様の原理を適用できる。即ち、(18)の *because* 節は、意味的、情動的な一つのまとまりを持ったものとしてとらえる事が可能であるが、(19)の *for* 節は、他の要素に対して独立性が強すぎて、もっと言えば、ほとんど文レベルとも言える要素であるため、限定される対象の上限を超えた要素となっていると考えられる。

- 1.9. ここで安藤 (1987) の議論を要約する。要するに安藤 (1987) では、焦点の位置に生じる要素には、適度な一つのまとまり (形式的にしる、意味、情動的にしる) が必要なのであり、それが成立した時にのみ、限定されやすさの向上を観察する事ができる事が主張されている。その限定度の高まりという基本原理に様々な言語現象が収束される為に、叙述的表現を限定的表現の変異形としてとらえ直したり、名詞句と副詞句を同じレベルで扱える様に、表面的相違にとらわれないで、その共通に有する特性である形式的・意味的・情動的限定性、まとまりに注目したり、文内部、文外部のある要因が、焦点の要素に影響を与える場合、限定度は高まるという、二重構造の考え方に注目したりした。

## 2. 伊藤（1992）の批判的検討

2.0. 第2章では、上述した様に、日英語の分裂文<sup>4)</sup>の焦点化可能な要素に関する制約を中心になされた対照研究である伊藤（1992）の主張を批判的に検討する。

2.1. 伊藤（1992）の主張は、概略、次の様なものである。

- ①日本語の分裂文の「Xの」の部分と Wh-Cleft の Wh 節を比べてみると、日本語の分裂文の前提部分は「の」の名詞性が比較的高く、全体として名詞句を形成しているのに対して、Wh-Cleft の前提部分は主要部を欠く関係節、つまり全体として名詞句を形成しているのではなく、純粹に節である。
- ②日本語の分裂文と英語の主に Wh-Cleft とを、どのような要素が焦点化可能かに関して見てみると、日本語の分裂文では焦点の位置に現れることができる要素は名詞相当語句であり、英語の Wh-Cleft についても概ねこの傾向があてはまる。また日本語の分裂文では理由を表す副詞節「～から」が名詞性を持たないにもかかわらず焦点の位置に現れることができるが、これは同要素が分裂文の「前提+焦点」という情報構造になじみやすく、同構文の統語的制約を override したものと考えられるが、英語の Cleft においては because 節が Wh-Cleft の焦点の位置には現れることができず、It-Cleft の焦点の位置に現れ得ることから、日本語の分裂文が焦点化可能な要素に関して It-Cleft 的なものまで引き受けているといえるかもしれない。

①については、本稿では、特に問題にしてはいないのでこれ以上は取り扱わない。

②については、本稿の中心課題と大きく関わっているのもう少し詳しく述べてみることにして、適宜、批判的検討を加える。

2.2. ②の日本語の分裂文では焦点の位置に現れることができる要素は名詞相当語句であるということを示す根拠として次の例が挙げられている。

- (20) 太郎は熱心に数学を勉強している。
- (21) 太郎が熱心に勉強しているのは数学だ。
- (22) 太郎が数学を勉強しているのは熱心だ。

2.3. さらに、上述した日本語分裂文の焦点化可能な要素に関する主張の妥当性を検討する形で分析が進められている。それは、一見したところその反例と思えるものが、実はそうではないという事を示す形でなされている。

- (23) 会社はあの銀行から借金をしている。
- (24) 会社が借金をしているのはあの銀行だ。
- (25) 会社が借金をしているのはあの銀行からだ。

(25)に見られる様に日本語の分裂文の焦点の位置には「名詞+格助詞」が現れることができる。これが上述した主張の反例にならないことを、日本語では名詞に格助詞が

ついてもその名詞的性質が維持されやすいという観点から根拠を提示しながら説明している。

- 2.4. その挙げられた2つの根拠の1つ目は、主題となれる要素は通常、名詞であるが、格助詞を伴った名詞も主題化されうることである。

(26) \*美しいはひまわりだ。/\*速くは太郎が走る。/\*育つは太郎がすくすくとだ。/大阪は食べ物がうまい。

(26)から明らかな様に名詞は主題になれるが、形容詞、副詞、動詞等は主題化できない。一方、「名詞+格助詞」についてどうなるかが示されている。

(27) 大阪では花博が開催されている。/大阪からは渋谷高校が出場した。/大阪駅には身障者用のエレベーターがない。

(27)から「名詞+格助詞」は主題化が可能であり名詞性を持っていると主張されている。

- 2.5. また、「AのB」という表現においては、A、Bには基本的には名詞が現れるが、「名詞+格助詞」もこの枠組に収まることが述べられている。

(28) \*美しいの極致/\*速くの秘密/\*育つの良さ/大阪の人口

(28)から名詞は「AのB」の枠組に収まるが、形容詞、副詞、動詞等はこの枠組に収まらないことが分かる。「名詞+格助詞」の場合については次の様になる。

(29) 花子からの電話/日光への修学旅行/花子との出会い

(29)から「名詞+格助詞」は「AのB」の枠組に収まり名詞性を持っていると主張されている。したがって、以上の観察から「名詞+格助詞」には名詞性が認められ、ゆえに分裂文の焦点の位置に「名詞+格助詞」が現れても上述した主張に対する反例にならないと述べられている。

- 2.6. 以上の様な手順で、「日本語の分裂文の焦点の位置に来れる要素は名詞相当語句である」という主張に対して、「名詞+格助詞」の場合が反例にならないことを伊藤(1992)は説明している。この様な説明は、一見してもっともらしいが、言語現象の説明に際して、より高い一般性、普遍性を希求する立場—これは筆者の立場であるが—から見ればあまり満足のいくものとは言えない。実際、ここであげられている名詞+格助詞の例は、英語に直せば全て、前置詞+名詞の例であり、即ち、前置詞句の例であり、その様な場合、ごく普通に分裂文<sup>9)</sup>の焦点の位置にそれが生起する事は、英語においては常識であるから、通常、特に問題は生じない様に思われる。

(30) あの銀行から from that bank

大阪では	in Osaka
大阪駅には	in Osaka Station
日光への	to Nikko
花子との	with Hanako

- 2.7. 要するに、名詞＋格助詞の場合は、分裂文<sup>31)</sup>の焦点の位置への生起という事に関する限り、対照言語学の観点から言えば、全く容易に扱える場合であり、ゆえに伊藤(1992)の様に、付加的な説明を加える必要はない様に思われる。伊藤(1992)の様な付加的な説明が必要なのは、「日本語の分裂文の焦点の位置に来れる要素は名詞相当語句である」という立場を取っているからであり、その様な立場を取らずに安藤(1987)の様に、「分裂文の焦点の位置に生じる要素には、適度な一つのまとまり(形式的にしろ、意味、情動的にしろ)が必要である」という立場を取れば問題は生じない様に思われる。この説明に基づけば、日本語、英語共に、この構文のこの問題に関しては、適用可能であり、その意味において、より一般性、普遍性が高い様に思われる。
- 2.8. 続いて、伊藤(1992)が述べている「日本語の分裂文の焦点の位置に来れる要素は名詞相当語句である」という主張の一見、反例と思えるが実はそうではない例として示されているのは副詞節の例である。

- (31) 花子が遅刻したから太郎は怒った。
- (32) 風邪のウイルスに感染したので太郎は風邪をひいた。
- (33) 勇気を身につけるために舞台に出る。
- (34) 太郎が怒ったのは花子が遅刻したからだ。
- (35) \*太郎が風邪をひいたのは風邪のウイルスに感染したのでだ。
- (36) 舞台に出るのは勇気を身につけるためだ。
- (37) \*花子が遅刻したからの太郎の憤慨
- (38) \*ウイルスに感染したのでの太郎の風邪ひき
- (39) 勇気を身につけるための舞台出演

これらの例に関する伊藤(1992)の主張を以下に述べる。これらの例から明らかな様に「～から」「～ので」「～ため」のうち「AのB」のテストフレームに収まる、つまり名詞性を持つのは「～ため」だけであり、ゆえに(36)の様な分裂文が成立しうる事は先の主張の予想するところであるが、(34)に見られる様に、名詞性を持たないにもかかわらず「～から」が分裂文の焦点の位置に現れる事は問題であると述べられている。この点について、「ので」が因果関係に立つ事柄を客観的に1つの事態として叙述するのに対して、「から」は理由や根拠を主観的に説明するものであり、(34)の様な文は副詞節「～から」が(35)の「～ので」と違って話者の主観つまり新情報を与えている点で分裂文の情報構造と共通しており、ゆえに分裂文の構造上の制約を overrideする形で名詞性を持たない「～から」が焦点の位置に現れるようになったと主張されている。

- 2.9. 要するに、伊藤（1992）の主張は、副詞節であっても、新情報を与えるという分裂文の情報構造と共通していれば、分裂文の構造上の制約に従わなくても名詞的なものとして処理することができるということである。しかしこの説明はやはり ad hoc なものであるという印象は否めない。分裂文の焦点の位置に生起するものの名詞性に固執したためなされた説明である様に思われる。ゆえにこの場合においても、やはり、安藤（1987）の主張を適用した方がいい様に思われる。即ち、(34)が許容されるのは、遅刻したからが、意味的、情動的な一つのまとまりを持ったものとして、とらえる事が可能であるからであり、(35)が許容されないことについては、風邪のウイルスに感染したのが、「ので」が有する客観的に1つの事態として叙述する特性のために、他の要素に対して独立性が強すぎて—ほとんど文レベルとも言えるので—限定される対象の上限を超えているという説明が可能である。これは先の(18)が許容されて、(19)が許容されない事と対応した現象と言えよう<sup>7)</sup>。いずれにせよ、この様な観点から説明する方が、より一般性、普遍性は高い様に思われる。
- 2.10. 最後に、日英語の分裂文の焦点可能な要素についての伊藤（1992）の分析の全体像を概観する。

Wh-Cleft, It-Cleftともに名詞句の焦点化が可能であることは言うまでもないが、副詞類は、文副詞を除き、It-Cleftの焦点になれるが、Wh-Cleftの焦点にはなれない。

- (40) \*What John walked up to Mary was *quietly*.  
 (41) It was *quietly* that John walked up to Mary.  
 (42) \*The one who Bill wants to share the room is *with Albert*.  
 (43) It is *with Albert* that Bill wants to share the room.  
 (44) It is *because he is sick* that John is not coming today.

That節、不定詞節、動詞句はWh-Cleftの焦点になれるが、It-Cleftの焦点にはなれない<sup>8)</sup>。

- (45) What I was most afraid of was *that he might be caught in the traffic jam*.  
 (46) \*It was *that he might be caught in the traffic jam* that I was most afraid of.  
 (47) What my father wanted was *for me to become a doctor*.  
 (48) \*It was *for me to become a doctor* that my father wanted.  
 (49) What John did was *write a letter to his father*.  
 (50) \*It was *(to) write a letter to his father* that John did.

伊藤（1992）は、日本語の分裂文により良く対応するのは、It-Cleftではなく、Wh-Cleftであると考えている。その立場から、(40)に見られる様に、Wh-Cleftでは様態副詞の焦点化が不可能であり、日本語の分裂文についても同様であると述べている。



- (51) \*太郎が花子に近づいたのはゆっくりとだ。

さらに、Wh-Cleft では、That 節、不定詞節の焦点化が可能であるが、これらの要素にはいずれも名詞性が認められるので日本語の分裂文と共通していること、Wh-Cleft では動詞句の焦点化が可能であるが、次例(52)から明らかな様に時制を伴うことはできないことを述べている。

- (52) \*What John did was wrote a letter to his father.

ゆえに、(49)の様な Wh-Cleft の焦点の位置に裸の動詞句が現れている様な例も(45)(47)と同様に名詞表現の周辺に位置づけることができると考えられている。一方、It-Cleft の場合、Wh-Cleft では焦点化され得ない前置詞句、because 節の焦点化が可能であるのに対して、日本語の分裂文では、「名詞+格助詞」、理由を表す「～から」が焦点の位置に現れることが可能であり、この点で日本語の分裂文は、焦点化可能な要素に関して英語の It-Cleft 的なものまで引き受けていると考えられている。

- 2.11 注の8で述べた様に、It-Cleft と Wh-Cleft の間で、その焦点の位置に生起する要素に関してはそれ程、区別がない様に思われる。事実、That 節、不定詞節、動詞句の場合、常に、It-Cleft の焦点になれないわけではなく、状況、言語環境によっては十分にその焦点になりうるし、(40)の様な場合においても、文脈次第で、Wh-Cleft における様態副詞の焦点化が可能である様に思われる。要するに、通常、存在する様に思われている焦点の位置に生起する要素に関する制約は絶対的なものではなく、ある条件下で、即ち、形式的にしる、意味、情動的にしる、適度な一つのまとまりがある場合、緩められ、その結果、この点に関する It-Cleft と Wh-Cleft の区別はあまり明確なものにならなくなるのである。ゆえに、伊藤(1992)の様に「名詞性」からこの問題を説明するのではなく、「まとまり」という立場から、そして日本語の分裂文と英語の Wh-Cleft に1対1対応を認めないという立場からここでの議論をとらえ直せば全て円滑な説明が可能となるのである。もっと言えば、ここでの議論はほとんど不要で無意味なものになるのである。特に、最後に述べられている日本語の分裂文と英語の Wh-Cleft に1対1対応があるという事では説明できない前置詞句、because 節の焦点化の問題については、日本語の分裂文は It-Cleft 的なものまで引き受けているという様な ad hoc な、その場しのぎの説明は全く不要になるのである。また(49)の様な例を名詞表現の周辺に位置づけるという様な説明も、(49)は適度な1つのまとまりを有していると言い直すことにより、説明の簡潔性、一般性が高まり、理論的卓越性が明らかになる。また、(52)の例では、時制を伴うために wrote 以下が文レベルに近いものと考えられ、限定しにくい要素、即ち、限定される上限を超えており、一つのまとまりと見なすことができない要素を含んだものであるという説明が可能である。

以上の議論から、ここでも安藤(1987)の分析の妥当性が明らかになった様に思われる。

### 3. 結論と今後の研究課題

本稿では、安藤(1987)での提案—分裂文の焦点の位置に生じる要素には、形式的にしる、意味、情動的にしる、適度な一つのまとまりが必要なのであり、それが成立した時のみ、限定されやすさの向上を観察することができるという提案—が、英語だけでなく、日本語にも具体的にあてはまるということを日英語の分裂文の焦点化可能な要素に関する制約を中心になされた対照研究である伊藤(1992)の主張を批判的に検討しながら論証した。また、日本語の分裂文と英語の Wh-Cleft が対応関係にあるという伊藤(1992)の考え方は必ずしも妥当なものではなく、日英語間のこの問題に関する対応関係は、英語の Wh-Cleft と It-Cleft を一つのものとして考えた方が理論的には優れているということについても述べてきた。結局のところ、安藤(1987)での提案が、この問題に関する限り、かなり一般性、普遍性が高いということも述べてきた。

最後に、今後のこの問題に関する研究課題を3つ述べておく。1つ目は、文中のある要素に何らかの形で焦点をあてる分裂文以外の構文、例えば、Topicalization, Left-Dislocation, Right-Dislocation 等に、分裂文についてのここでの議論で導き出された原理が適用できるのか、適用されるとしたらどのような条件下でなされるのかということである。これは非常に面白い研究となると思われるが、同時に、データの処理の問題等、多くの課題が残されているのでかなり大変なものになると思われる。2つ目は、日本語の分裂文について、さらに多くのデータを用いて、より徹底した研究が必要であるということである。日本語の分裂文については、これまであまり研究がなされていなかったという点においては、伊藤(1992)の研究は評価できるが、様々な観点からより綿密な研究がなされることが望ましい。最後は、ここでの提案が日本語、英語以外の言語にどの様に適用されるかということである。そして適用されるとしたらどのような条件下でなされるかを詳しく研究する必要がある。その様な研究がなされて初めて、ここでの提案の一般性、普遍性が立証されるのであるが、筆者は、細かい下位制約を課する必要は生じるかもしれないが、基本的には適用可能だと確信している。だが、そのために多くの時間と労力を必要とすることは紛れもない事実である。

#### 注

- 1) 安藤(1987)で単に「分裂文」と言う場合は、いわゆる It-Cleft を指示する。Wh-Cleft の場合は、「擬似分裂文」という呼び名によって区別している。
- 2) この点については Culicover(1977)において詳しく論じられている。
- 3) 次の例において、(a)の容認性が(b)より低いのは、*flat* の、*scarlet*、*black*等の色彩表現と比べた場合の本来的な形容詞性の高さ(名詞性の低さ)によるものであろう。
  - (a) \*It was *flat* that they hammered it.
  - (b) (?)It was *scarlet* that they painted it.
- 4) 伊藤(1992)では、日本語の分裂文に対応するのは、英語の擬似分裂文(Wh-Cleft)と見なし、分析を進めている。しかし、筆者は、日本語の分裂文に対応するのは擬似分裂文(Wh-Cleft)だとは考えない。日本語の分裂文には、It-Cleft の側面も、Wh-Cleft

の側面も存在するので、1対1対応で処理しないで2つまとめて考えた方が、より一般性の高い普遍的原理に到達する様に思われる。

- 5) It-Cleft の場合には、ごく普通に生起する。Wh-Cleft の場合、その生起に関して多少、困難を伴うが、上述した様に、筆者は英語の Wh-Cleft と日本語の分裂文に 1対1 の対応関係を想定しないので特に問題は生じない。
- 6) もちろん、日本語、英語ともに視野に入っている。
- 7) (18), (19)は英語の It-Cleft の例であり、(34), (35)は日本語の分裂文の例である。ゆえに、伊藤 (1992) の枠組だとその対応関係が問題になるかもしれないが、上述した様に、筆者はその様な対応関係を考慮に入れない枠組を採択しているので、この点については何の問題も生じない。
- 8) この主張はその制限が厳し過ぎる。それは、この事に対する反例が明らかに存在するからである。

(a) It is *sit* that he does best.

(b) It was *to annoy Jim* that they invited her.

(c) (?) It was *that she was so sneaky about it* that bothered me the most.

安藤 (1987)

これらの反例から、It-Cleft と Wh-Cleft の間で、その焦点の位置に生起する要素に関してはそれ程、区別がないのではないかと推測される。

### 参 考 文 献

- Akmajian, A. (1979) *Aspects of the Grammar of Focus in English*. New York : Garland.
- 天野政千代 (1976) 「分裂文の焦点の位置における副詞」『英語学』第14号
- 安藤裕介 (1987) 「分裂文管見」『活水女子大学・短期大学 活水論文集』第30集 英米文学・英語学編
- Bolinger, D. (1972) "A Look at Equations and Cleft Sentences." in Firchow, E.S. et al (eds.), *Studies for Einar Haugen*. The Hague : Mouton.
- Borkin, A. (1984) *Problems in Form and Function*. Norwood : Ablex Publishing Corporation.
- Culicover, K. S. (1977) "Some Observations concerning Pseudo-Clefts." *LA*. 3, 3.
- Declerck, R. (1984) "Predicational Clefts." *Lingua* 61.
- (1986) "Two Notes on the Theory of Definiteness." *JL* 22.
- Donnellan, K. S. (1971) "Reference and Definite Descriptions." in D. D. Steinberg & L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Emonds, J. E. (1970) *Root and Structure-preserving Transformations*. Indiana Univ. Linguistics Club.
- Givón, T. (1982) "Logic vs. Pragmatics, with Human Language as the Reference: Toward an Empirically Viable Epistemology." *Jprag* 6.

- Gundel, J. K. (1977) "Where do Cleft Sentences Come From?" *Lg* 53.
- Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on Transitivity and Theme in English Parts 1, 2." *JL* 3.
- (1968) "Notes on Transitivity and Theme in English Part 3." *JL* 4.
- Higgins, F. R. (1976) *The Pseudo-cleft Construction in English*. Indiana Univ. Linguistics Club.
- 伊藤 晃 (1992) 「日英語の分裂文の対照研究—焦点化可能な要素に関する制約を中心に」『語法研究と英語教育』第14号
- Ivić, M. (1964) "Non-omissible Determiners in Slavic Languages." in Lunt, H.G. (ed.), *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics*. The Hague.
- Klima, E. S. (1964) "Negation in English." in Fordor, J. A. & J. J. Katz (eds.), *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*. Englewood Cliffs, N. J.
- Kuno, S. (1976) "Subject, Theme and the Speaker's Empathy." in C.N. Li. (ed.), *Subject and Topic*. New York: Academic Press.
- Prince, E. (1978) "A Comparison of WH-clefts and IT-clefts in Discourse." *Lg* 54.
- Radford, A. (1981) *Transformational Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rutherford, W. E. (1970) "Some Observations concerning Subordinate Clauses in English." *Lg* 46.
- Smith, N. & Wilson, D. (1979) *Modern Linguistics*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd.
- 寺津典子 (1983 a) 「言語理論と認知科学」 渕一博 (編) 『認知科学への招待 第5世代コンピュータの周辺』 東京: NHK ブックス
- (1983 b) 「談話における照応表現」 『言語』 第12巻, 第12号.
- 安井 稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』 東京: 大修館